



## CFI ニュースレター C2022-08 ヤベツの祈り

### [今月の聖書]

「さて、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認することである。信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。…なぜなら、神に来るものは、神がいますことと、ご自身を求めるものに報いてくださることを必ず信じるはずだからである。」(ヘブル 11: 1.6)

「私が悩みの中から主を呼ぶと、主は答えて、私を広いところに置かれた。主が私に味方されるので、恐れる事は無い人は私に何をなし得ようか。」(詩篇 118: 5.6)

**ヤベツは彼の兄弟たちよりも重んじられた。彼の母は、「私が悲しみのうちにこの子を産んだから」と言って、彼にヤベツという名をつけた。ヤベツはイスラエルの神に呼ばわって言った。**

①私を大いに祝福し、

②私の地境を広げてくださいますように。

③御手が私と共にあり、

④災いから遠ざけて、私が苦しむことのないようにしてくださいますように。」

そこで神は彼の願ったことを叶えられた。 (歴代誌第一、4 : 9.10 新改訳聖書)

「私は苦しまない前には迷いました。しかし今は御言葉を守ります。あなたは善にして善を行われます。あなたの定めを私に教えてください。苦しみにあった事は、私に良いことです。これによって私はあなたの掟を学ぶことができました。」(詩篇 119: 67-71)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「ヤベツの祈り」をご紹介いたしましょう。約 20 年ほど前に、米国の Bruce Wilkinson が取り上げた祈り、The prayer of Janez が翻訳されて日本でも多くの人に読まれました。この祈りの中に信仰の真髓がよく表されています。新約聖書ヘブル人への手紙 11 章には旧約聖書の信仰の勇者たちの物語が書かれています。しかしヤベツは、そこに記録されるような偉大な人物ではありませんでした。歴代誌上 4 章には、ユダ族の歴史が書かれています。気の遠くなるようなカタカナの名前が続いていますが、その 44 番目にヤベツの名前が出てくるのです。旧約聖書の無数の名前の中に隠された小さなキラリと光る偉人がヤベツです。

「ヤベツ」は「悲しむ、痛む、苦しむ」という意味があります。どのような背景であったかは全くわかりませんが、母親はこの子を出産するときに大きな苦しみを経験しました。そしてその苦しみを子供の名前にしたのです。彼はその重荷を一生背負っていくこととなります。しかし彼の信仰は彼の人生を逆転して、兄弟親族の中で最も尊敬される人と変わったというのです。

あなたは生まれてから今日までの自分を変えたいと思った事はありますか。「未来を変えてください」という祈りがなければ、実は信仰もないのです。神様が祝福したいと願っていても、求める気持ちがなければ得られないのです。サタンは夢や希望を持って祈ることを忘れさせ、仕方ない現状に甘んじるように誘導します。そこでクリスチャンであっても力を失ってしまうのです。ヤベツは最低の人生のスタートを切ったのですが、神の祝福によって感謝と喜びに満ちた最高の一生を聖書の中に記録したのです。あなたの望んでいる事柄が実現しますようにお祈りいたします。

### (お知らせ)

\* 引き続きウクライナ支援募金にご協力ください。小さな祈りを積み上げていきましょう。

\* 地区集会について検討しておりますが、過去最高の感染拡大となっていましたので、もうしばらく様子を見て参りましょう。

「主は生きておられる」

脇坂 美都子 (広島県)

日本キリスト教団尾道久保教会にて受洗から 60 年になります。

教会へ初めて行ったのは中学 3 年の夏頃。誘われたのではなく、身近な所にクリスチャンは誰もいませんでしたが、どうしても教会へ行きたいと思い、勇気を出して 1 人で教会に行きました。時間が早かったのでしょうか、中高生会に案内され、始めから終りまで涙が出て泣いていました。後のキャンプの時、「あの時どうして泣かれたのですか」と聞かれて返事ができず、また涙が出てどうしてか私にもわかりません。神様を思うと涙が出たことは覚えています。それから日曜日は教会へ行き、教会学校の先生の手伝い、夕方週末は週報の印刷や掃除に毎週行っていました。高校 1 年のクリスマスに、牧師から洗礼を勧められ信仰があったかどうかわかりませんが、教会が好きで離れることはないだろうと自分でも思い、諮問委員会で受け入れられて 1962 年 12 月 23 日に洗礼を受けました。お小遣いをためて聖書と讃美歌を買い、夜遅くまで読んだことを覚えています。

刑務所慰問で「キリストにはかえられません」を独唱しました。漁師町吉和の子ども施設では、おやつを配り紙芝居や歌を歌い、青年会の役員もし活発に働きました。

夫の父が死んで、母から矢野に帰ってくれないかと言われた時、即決し一旦引越しの為尾道に帰る時、瀬野川をまたいで山から山にかかった大きな虹を見ました。これは、矢野に帰ってからの生活を神様が祝福の約束をして下さったと思ひ、平安と恵み、喜びを得ました。

現在の安芸区矢野町の主人の実家に移ってからは、山白先生が牧会された「日本キリスト教団船越教会」に行きました。子供が小さく仕事があったので、教会学校と礼拝に出ていました。船越教会で 11 年くらい過ごし、その後、植竹先生の教会に転会し広島キリスト教会でもう 35 年くらいになります。礼拝に出るのが精一杯です。高血圧とめまいと足が弱ってきました。76 歳です。とりなしのお祈りのご用ぐらいしかできません。

信仰の働きといえば、主人の弟 1 人が経済的に困難だった時、み言葉を聞いてのがれることができず助けました。

聖書ヨハネ第一の手紙 3 章 17 節「世の富を持っていながら、兄弟が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあろうか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。」主人の弟 2 人目が統合失調症で入退院している時、すべて親代わりをし最後までお世話をしました。その弟の子、姪を両親が離婚して母がいないため、小学 1 年から高校 3 年まで育てました。

聖書マタイ 18 章 5 節「また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」のみ言葉により、イエス様を受け入れないことはできないと思ひ育てました。

私の息子(次男)が、9 歳で悪性リンパ腫にかかり、5 年目に骨髄移植しか助ける方法がなかった時、広島日赤病院に無菌室の設備ができ、第 1 号の患者で奇蹟的に助けられました。長男はドナーとして、弟に骨髄を提供して後 21 歳(大学 3 年)の時、交通事故で死亡しました。教会で葬儀をし、植竹利侑牧師が司式をして下さり、大変良い証しになりました。私は、これは一番良い時に神様がとって下さったと思っています。なぜなら、次の日から車を買って通学するようになっていましたが、視力が弱く運転が非常にへただったから、加害者になることのないようにして下さったと思っています。次男はまた大病を患い、特定疾患のファブリー病(先天性糖脂質代謝異常症)で、15 年前 34 歳で脳梗塞を患い左半身不随になっていますが、自分の事は自分でできます。2 週間に 1 回点滴治療に会社を休んで行っています。49 歳です。夫は、8 年前肺胞出血で受洗後に死亡しました。今は次男と 2 人暮らします。

主は生きておられます。試練の時、苦しみ悲しみの時、いつも共にいて励まし助けて下さいました。主の聖名はほむべきかな。

アーメン

